

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

2017年度フィールドネット・ラウンジ企画 セミナー

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of
Foreign Studies
Fieldnet Lounge Seminar 2017

草の根から地域住民が生み出す「食」と「農」の空間

—どうやって見つけ、調べるか？

報告書

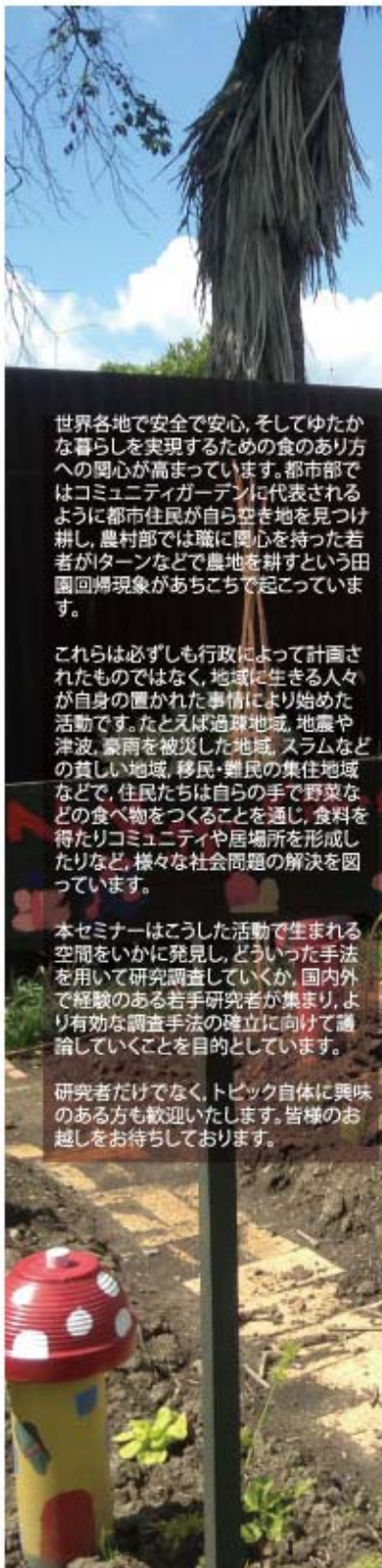
Fieldnet Lounge Seminar 2017

Open spaces for “food” and “agriculture” created through bottom-up activities by local
residents: Methodology to find and analyze the spaces

企画責任者 新保 奈穂美（筑波大学生命環境系）

開催日時 2018年1月20日（土）13:00～17:00

場所 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 マルチメディア会議室（304）



世界各地で安全で安心、そしてゆたかな暮らしを実現するための食のあり方への関心が高まっています。都市部ではコミュニティガーデンに代表されるように都市住民が自ら空き地を見つけ耕し、農村部では職に関心を持った若者が「ターン」などで農地を耕すという田園回帰現象があちこちで起こっています。

これらは必ずしも行政によって計画されたものではなく、地域に生きる人々が自身の置かれた事情により始めた活動です。たとえば過疎地域、地震や津波、豪雨を被災した地域、スラムなどの貧しい地域、移民・難民の集住地域などで、住民たちは自らの手で野菜などの食べ物をつくることを通じ、食料を得たりコミュニティや居場所を形成したりなど、様々な社会問題の解決を図っています。

本セミナーはこうした活動で生まれる空間をいかに発見し、どういった手法を用いて研究調査していくか、国内外で経験のある若手研究者が集まり、より有効な調査手法の確立に向けて議論していくことを目的としています。

研究者だけでなく、トピック自体に興味のある方も歓迎いたします。皆様のお越しをお待ちしております。

草の根から地域住民が生み出す 「食」と「農」の空間

— どうやって見つけ、調べるか？ —

2018年1月20日(土)
13:00-17:00

東京外国語大学AA研
(東京都府中市朝日町3-11-1)
マルチメディア会議室(304)
参加無料・事前登録不要

13:00~13:10 開会挨拶・趣旨説明
新保奈穂美(筑波大学)

13:10~13:40 話題提供1
「アジアで土地と食の関係性をひもとく」
土屋一彬(東京大学)

13:40~14:10 話題提供2
「計画と邂逅—難問や境界域の探検から学んだ教訓」
ルブレヒトクリストフ(総合地球環境学研究所)

14:10~14:30 コーヒーブレイク

14:30~15:00 話題提供3
「被災地発信の<生きがいとしての農業>
—「復興支援」から地域社会へ—」
望月美希(東京大学大学院)

15:00~15:30 話題提供4
「都市における新しい「食」空間のカタチ」
飯田晶子(東京大学)

15:30~15:50 コーヒーブレイク

15:50~16:50 大学院生・実務者ディスカッション
ファシリテーター: 太田和彦(総合地球環境学研究所)
参加者: 坂本優紀(筑波大学大学院)
別所あかね(東京大学大学院)
問根谷実里(クックパッド株式会社)

16:50~17:00
閉会挨拶

2017年度
フィールドネット・
ラウンジ企画
セミナー

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) 2017年度フィールドネット・ラウンジ企画セミナー
問い合わせ先: 新保奈穂美(企画責任者) shimpo.naomi.gn@u.tsukuba.ac.jp

目次

趣旨	4
当日プログラム	5
実施報告 1. 話題提供	7
実施報告 2. 大学院生・実務者ディスカッション	11
総括・今後の課題	12
謝辞	12

趣旨

国内外で安全で安心、そしてゆたかな暮らしを実現するための食のあり方への関心が高まっている。都市部ではコミュニティガーデンに代表されるように都市住民が自ら空き地を見つけ耕し、農村部では職に関心を持った若者がIターンなどで農地を耕すという、田園回帰現象があちこちで起こっている。また、得られた野菜や畜産物を、既存の市場だけでなくマルシェなど新たな場所で提供・共有するようにもなってきている。これらは必ずしも行政によって計画されたものではなく、その地域に生きる人々が自身の置かれた事情により始めた活動である。たとえば過疎地域、地震や津波、豪雨を被災した地域、スラムなどの貧しい地域、移民・難民の集住地域などで、住民たちは自らの手で野菜や果物などの食べ物をつくることを通じ、食料を得たりコミュニティや居場所を形成したりといった、様々な社会問題の解決を図っている。

上記のような活動によって創出される計画されない空間をいかに調査し、分析するかについて定まった手法はない。そもそもそうした空間をどのように見つけるか、どういった手法（インタビュー形式、参与観察等）が有効であるのか、また実施可能であるのか、見極めにくい。また、現地では様々な事象（地形、土地利用、生物、水質、集落構造、生業、住民の関係など）から情報を引き出すことが必要であるが、その最初のステップを示す教科書がないことが問題である（浅野，2017）。関連する研究分野も都市計画学や農村計画学、地理学、社会学、民俗学など多岐にわたり、学際的な思考も求められるため、分野を超えた学びが必要である。

そこで本ワークショップの目的を、フィールド調査を盛んに行っている若手研究者を多様な分野から招集し、各々の調査経験を語りあい、計画されない「食」の空間を調べるための、より効果的な調査手法のあり方を議論することとした。また将来の研究界を担う大学院生も招き、手法について疑問を気兼ねなく質問・議論できる場を提供した。

引用文献：浅野悟史（2017）、「農村計画学のフロンティア」シリーズを語る—『ラオスの森はなぜ豊かにならないのか—地域情報の抽出と分析』。農村計画学会誌 36(2), 205-206



当日の様子（撮影者：新保奈穂美）

当日プログラム

- 13:00-13:10 挨拶, 趣旨説明 (新保奈穂美)
- 13:10-13:40 話題提供 1 「アジアで土地と食の関係性をひもとく」
土屋一彬 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
- 13:40-14:10 話題提供 2 「計画と邂逅—隙間や境界域の探検から学んだ教訓」
ルプレヒトクリストフ (総合地球環境学研究所・FEAST プロジェクト)
- 14:10-14:30 コーヒーブレイク
- 14:30-15:00 話題提供 3 「被災地発信の〈生きがいとしての農業〉—『復興支援』から地域社会へ」
望月美希 (東京大学大学院新領域創成科学研究科・日本学術振興会特別研究員)
- 15:00-15:30 話題提供 4 「都市における新しい『食』空間のカタチ」
飯田晶子 (東京大学大学院工学系研究科)
- 15:30-15:50 コーヒーブレイク
- 15:50-16:50 大学院生・実務者ディスカッション
ファシリテーター: 太田和彦 (総合地球環境学研究所)
参加者: 坂本優紀 (筑波大学大学院生命環境科学研究科)
別所あかね (東京大学大学院サステナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム)
岡根谷実里 (クックパッド株式会社)
- 16:50-17:00 コメント・まとめ・閉会挨拶 (新保奈穂美)

Programme

13:00-13:10	Introduction SHIMPO Naomi (Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba)
13:10-13:40	“Explore the connections of land and food in Asia” TSUCHIYA Kazuaki (Graduate School of Agricultural and Life Sciences, the University of Tokyo)
13:40-14:10	“Planning and coincidence: Lessons from fieldwork on marginal places” RUPPRECHT Christoph (FEAST Project, Research Institute for Humanity and Nature)
14:10-14:30	Coffee break
14:30-15:00	“Agriculture as a reason for living in disaster-stricken areas: From ‘restoration project’ to local life” MOCHIZUKI Miki (Graduate School of Frontier Sciences, the University of Tokyo)
15:00-15:30	“New spaces for ‘food’ in the city” IIDA Akiko (Department of Urban Engineering, the University of Tokyo)
15:30-15:50	Coffee break
15:50-16:50	Discussion by students and practitioners Facilitator: OTA Kazuhiko (Research Institute for Humanity and Nature) Participants: SAKAMOTO Yuki (Graduate School of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba) BESSHO Akane (Graduate School of Frontier Sciences, the University of Tokyo) OKANEYA Misato (Cookpad Inc.)
16:50-17:00	Conclusions SHIMPO Naomi (Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba)

実施報告 1. 話題提供

話題提供 1 「アジアで土地と食の関係性をひもとく」

土屋一彬（東京大学大学院農学生命科学研究科）

土屋氏からは「食」「農」といったキーワードから、よく話題に挙がる市民農園やコミュニティガーデン等の空間、そしてそこで生産される野菜だけではなく、漁業や酪農、市場や飲食店も含めて、広く「食べるもの」を包括的に捉えようとする視点でアジアと土地の関係性を解き明かすための研究が紹介された。研究の問いは「流通システムからみて可能性はあるか?」「可能性を実現していくための課題は何か?」「課題を克服するアイデアは何か?」である。

バンコクを対象とした研究の流れは、まず住民へのヒアリングによる市場の重要性の確認から行われ、役所の様々な部署にコンタクトをとったところ、土地利用データを取得することができ、そのデータに入っていた農地だけでなく市場の情報を活用し、聞き取り対象のサンプリングが可能になった、とのことであった。狙った情報を得ようとしたというよりも、ひとまずおおまかに当たってみて、得られたもので研究の方向性を構築した流れである。たとえば土地利用データがもたらえた背景に、アジアは日本の下請け企業が多かったために空間情報データの整備が進んでいた状況があり、これは予想していなかったとのことである。結果、土地利用と市場、スーパーマーケットの立地の変遷から流通システムの可能性を分析することが可能となった。

一方、大阪においては目的としていた直売所の可能性検討はすぐに終わったため、植物生態学の視点を活かして「農地の植生調査」を行ったところ、あまり使われていない農地を発見し、そこから長期にわたり観察を続けて農地の利用度の検証を行うようになった。そして、「隠れた未利用地」を使えば相当量の農作物を生産できる可能性を示すことができた（Tsuchiya et al. 2012¹）。

話題提供 2 「計画と邂逅—隙間や境界域の探検から学んだ教訓」

ルプレヒトクリストフ（総合地球環境学研究所・FEAST プロジェクト）

ルプレヒト氏は修士では日本学、生態学、哲学をドイツで専攻し、博士では地理学、都市計画、生態学をオーストラリアで専門とした。もともとは日本学であったが、データで語らない文化に限界を感じたことと、将来の職の見通しから、違う分野に移行していったという。生活のなかで見つけた誰が生み出したかよくわからない緑地（以下、非公式緑地）について興味を持ち、指導教員など他の人には「どうせちょっとの雑草くらいしかない」「調べる価値もない」と評されながらも、その面白さを示すために非公式緑地が都市全体にどのくらいあるのかを調べることにした。それを研究対象にするには沢山の苦労があった。時間と予算の制限があること、転々としていたため知り合いのネットワークがないことである。それを乗り越えて、独自の研究を切り拓いていっている。

¹ 土屋一彬・原祐二・宮川智子（2012）、都市近郊における土地利用制度と農地の管理粗放化および自給的利用との関係性解明。都市計画論文集 47(3), 223-228

ブリスベンと札幌の2都市を対象とし、植生や鳥類の調査を行った。自分で調査区を選択するとバイアスがかかるため、グリッドを用いてシステマティックに調査区を設定した(Rupprecht & Byrne 2014²)。実際に現場を見てみると、空き地だけではなく色々な場所に色々な形の名のない空間があることがわかり、特にそれらは札幌で発見された。このような「邂逅」が札幌で多かった理由はブリスベンでは車を主に交通手段としていたのに対し、札幌では自転車を用いて移動していたからであった。

ただし邂逅は何もしないで得られるものではなく、あらかじめ「計画」を一生懸命したあとの予想外の発見が面白くなる。偶然に出会う機会を増やすのが計画であり、それは全くの偶然ではなく、確率の問題なのである。このため、うまくいきそうな手法を用意することが大事である。参考として、P.K.ファイヤーアーク著の『方法への挑戦—科学的創造と知のアナーキズム』が薦められる。

これまでの「邂逅」の経験から、うまくいきそうな探検手法として自転車と”Flâneur (ぶらぶらする)”が挙げられる。自転車は1日でかなり回ることができ、ほどこにでも行けることができる。速度も遅すぎず速すぎず、止まるのも容易である。また人から話しかけられることが多く、逆に人に話しかけることも可能である。そして調査者自身が楽しめるため、行く回数が多くなるのでより多くのことを発見できる。”Flâneur”は時間・目的地に制限されず、頭と心がリラックスして面白いものに気づきやすい、話しかけられやすい・話しかけやすいというメリットがある。ほかにも航空写真を使って面白そうなところにあたりをつけてから現場に行きビデオ撮影を行い、併せて映像人類学者と協力して聞き取り調査も行っている。電車から写真やビデオを撮影するといった手法もうまくいきそうであるが、撮影後の分析が難しいためなかなか研究には結びつけられていない。

話題提供3 「被災地発信の〈生きがいとしての農業〉—『復興支援』から地域社会へ」

望月美希（東京大学大学院新領域創成科学研究科・日本学術振興会特別研究員）

望月氏は環境倫理学から地域社会学へ専門を移行し、現在は東日本大震災と農村の復興を研究テーマとしている。当初は、「社会学」も「フィールドワーク」もきちんと理解していなかったのだが、東北へ足を運ぶきっかけとなったのは東日本大震災発生の1年後、野菜工場で農業復興をするというニュースに漠然とした違和感を覚えたからであった。当時学んでいた環境倫理からすれば、野菜工場は農薬を使わずに安全な作物を生産でき、特に放射能問題が深刻ななかでは歓迎されるべき存在であったが、被災者は本当にそれを受け入れたのか、家族農業や土壌を用いた慣行農業、それまで営まれてきた生活はどうなったのか、という点に疑問をもったという。すなわち、被災者の視点から見た「農業の復興」とは何か、と考えたことがきっかけとなった。

そのような状況のなか、2012年11月に指導教員が関わる宮城県岩沼市玉浦地区復興まちづくりプロジェクトにより、被災を受けた現場とかわる機会を得て、まちづくりを目的としたNPOを運営する地域住民U氏と知り合うことになった。2013年5月に田植えイベントがある情

² Rupprecht, C.D.D., Byrne, J.A., 2014. Informal urban green-space: comparison of quantity and characteristics in Brisbane, Australia and Sapporo, Japan. PLoS ONE 9, e99784.

報を得て、フィールドワークとは何をしたらよいかわからないままであったが、その期間に何日か滞在することとなった。岩沼市内を歩くと、災害危険区域である沿岸部住宅跡地に、未だ住宅再建もままならない状況の被災者自らの手でつくったであろう、自給用の小さな畑と作業小屋を見つけた。これを見て、被災者にとっての農業を再開する「意味」や「動機」とはなにか、という点に復興を読み解くヒントがあるのではないかと着想を得た。

社会学においてフィールドワークには非関与型（非参加型観察、1回限りの聴き取り、質問紙調査）と関与型（参与観察、ヒアリング、一次資料収集）がある（佐藤，2006³）。関与型ではフィールドノート、ヒアリング記録、および独自に入手した資料がデータとなる。自分自身は1～2週間の滞在を繰り返し、地域活動を手伝うボランティアとして住民の会話に混ざるといって、参与観察を行った。地域内も自転車で回った。こうしたフィールドワークでは、思い通りにヒアリングが進まなかったり、新たな発見がなかったりと、研究が進まない日があることに焦りを感じることもあったが、指導教員からは「何もない日があってもいいですよ」と言うアドバイス通りに、焦らずに地域の人々と関わり続けた。半年ほど玉浦で過ごすなかで、自分が何者であるかを住民に理解してもらうとともに、調査の重要な協力者となるS氏と出会った。

調査中の悩みもあった。「ボランティア」としての立場と、「研究者」としての立場の間にいる自分が、調査被害を生み出さないか心配であった。調査被害とは、研究に尽力するあまり、被調査者の心情を顧みない調査をしてしまい、被調査者を傷つける行為のことである。これは生活が不安定な状況にある被災者にとって、大きな負担となる。東日本大震災後は、多くの場面で調査被害が発生し、傷ついた被災者も少なくないという。私自身、調査被害を恐れて「調査に来ている」とは言えず、しばらくは「ボランティアの私」として過ごした。しかしその後、地域のキーパーソンであるS氏に、復興について研究しており岩沼の農業について状況を知りたいと打ち明け、S氏を通じて農業者・元農業者を紹介してもらうことで具体的なインタビューが開始した。

住民による自発的な活動を捉えるには、住民の目線を理解することが重要である。そのためには現地の人々と共に生活・行動してみることが必要である。そのなかで自分が何者であるかを伝え、何のためにこの地域にやってきたのか、何を知りたいのか示す必要がある。併せて現場と理論を往復しなければならない。フィールドワークは必ずしも仮説検証型の調査にはならず、現場で初めてわかること、触れることが存在する。フィールドを漂い身を任せること、名もない空間、名もない現象を自らの手で掘り起こすことが求められる。残る問いは、研究者はそうして掘り起こした空間や人々をどのような形で支えていけるのかということである。

話題提供4「都市における新しい『食』空間のカタチ」

飯田晶子（東京大学大学院工学系研究科）

飯田氏はパラオを長年研究対象地としている。本報告では小島嶼国のコミュニティが消費する世界の土地資源量はどれほどか、研究したときの話に焦点をあてる。まず研究の着眼点についてである。国別のエコロジカル・フットプリントなどを見ても、自らの問題として捉えにくく、一人ひとりが認識・実感できるスケールの研究の必要性を感じていた。もともと博士研究では流域圏

³ 佐藤郁哉（2006）、フィールドワーク 増訂版一書を持って街へ出よう。新曜社

を基礎とする土地利用計画手法を研究しており、持続的な土地利用の維持は人の景観（ランドスケープ）への働きかけによるものであることを示していた。そのなかで、グローバル化による食生活の変化により、景観（ランドスケープ）が変化していることに気づいた。そこで「景観」と「食」を繋ぐ研究をすることになった。

パラオのなかでも最北端の、伝統的な生活が残る住民わずか 86 人のオレイ集落を研究対象地とした。ここで外国への土地資源の依存量を調査することとなった。研究方法はフィールド調査と物質フロー解析の組み合わせである。この正反対な調査方法の組み合わせを可能としたのは、異分野の研究者のコラボレーションであった。フィールド調査は学生に住み込んでもらいながら、アンケートと写真記録により食卓に並ぶ食材の調査を行った。一方物質フロー解析にあたっては、統計資料を用いての計算が行われた。結果は未発表のため報告書には記述できないが、意外な結果もわかり、これは異分野が組み合わさったからこそできた研究結果であったといえる。研究の波及効果も面白く、地元の高校生がタブレットを用いてアンケート調査を自発的に行い、自分たちの食生活の分析を行ったという。さらに、地元の健康に関する研究機関も興味を持ってくれ、世界 4 位の肥満国であるパラオでの食生活の改善に資する研究プロジェクトが進行中である。Future Earth で示されている”Trans-disciplinarity”な研究フレームはこれから益々重要になっていくと考えられる。

最初は景観という研究から、景観×食という研究になり、さらに景観×食×健康という研究の着眼点が広がっていった。土屋氏は違う国で研究を広げたが、それとは異なり一つの国で研究を広げることとなった。手法としては異分野の研究者との協働で可能となる新しい手法に挑戦することとなった。ローカルなフィールドの知見とグローバルなネットワークの知見の掛け合わせも有効であった。そして、そうした学際的な研究デザインは研究の社会的意義を高めることとなり、何より面白い。これはフィールドワークをする者だからこそ挑戦できることかもしれない。

実施報告 2. 大学院生・実務者ディスカッション

ファシリテーター：

太田和彦（総合地球環境学研究所）

参加者：

坂本優紀（筑波大学大学院生命環境科学研究科）

別所あかね（東京大学大学院サステナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム）

岡根谷実里（クックパッド株式会社）

本ディスカッションは話題提供で挙げたトピックをもとに、大学院生が自身のこれからの研究に、話題提供で得られた手法の知見をどう活かしていくか、また実務者が食に関する事業とどのように絡めていけるか議論することを目的に行われた。ファシリテーターのもと、実際の進行は主に参加者から話題提供者にさらに聞きたいことを挙げてもらい、話題提供者やその他聴衆が回答するという形となった。挙げた質問と回答の概要は以下のとおりである（敬称略）。

坂本：言語の壁や人種の壁はどのようにクリアしたのか？

土屋・飯田：現地の人に助けを求めよう。論文集めや現地調査の身元保証をしてもらった。

別所：人を対象とする研究について、同じ人をこれからも対象として見ていくのか、それとも異なる人々を見ていくのか。

飯田：これからはより若い世代に焦点をあてて見ていきたい。

望月：社会問題に焦点をあてるのであれば、「もっとも弱い人」に目を向けていかなければならない。そうした意味で対象者は変わりうるが、問題の解決に向けては、現在の被調査者と長く付き合っていきたい。

岡根谷：地域の問題について多地域比較をするにあたり、どのようにしていくかが気になっている。グローバル化に伴いますます重要となると思うが、それぞれ点でしかわからない。

太田：EUとアメリカは繋がってプロジェクトをしていることが多い。各国の研究者がフィールドワークをして、ネットワーク内で共有している。

吉田（AA研）：それぞれの地域のことを深く知っている人と知り合うことが有効。

（会場）：現地に成果を還元していくにあたり、どうやって行政とコンタクトしていけばよいか。

土屋：フレーミングが大事。行政にもいろいろなタイプがある。強権的であることも。一方、市民に関しては、たとえば市場の品物は若い人には売れなかったりもする。

望月：住民目線での研究を進めるなかでは、地域により行政と住民の関係性（良好か、対立関係か）に違いがあるため、そこを踏まえて研究者も動く必要がある。

飯田：うまくいくときは自治体に熱意のある人がいる。行政と市民は必ずしも対立しない。

総括・今後の課題

本セミナーによって、世界で注目が集まりつつある「食」と「農」のトピックに関わる若手研究者の創意と試行に裏付けられた研究の視点や手法が共有された。共通していたことは、ある程度事前に調査計画も立てるが、フィールドワークを通じて得られた着想や出会いを活かして、新しいアプローチを取っていくようにしていたことである。住民の活動およびそれによって創出されている空間といったボトムアップがベースとなっている調査対象の場合、事前に考え得るだけの仮説を立てておくことによって、新たな事実の発見が可能となる。フィールドワークにおいても決められた調査だけ行うのではなく、たとえば、土屋氏のように関連しそうな自治体の部局をまわって話を聞きにいたり、ルプレヒト氏のように自転車を使って対象地をくまなくまわったりと、当初では必ずしもやらなければならなかった調査以外の事にも取り組んでみることで、真実に近づいていくステップとなることが話題提供者の発表から読み取れた。一見必要のないことから必要なことを発見しようとする、柔軟な手法と姿勢を身に付けていくことがこれからの研究者には求められるだろう。

また、学際的な分析が求められるトピックがゆえに、異分野の研究者がコラボレーションすることの重要性も提示され、今回構築されたネットワークが新たなコラボレーションを生むことが期待される。ランドスケープ計画と物質フロー分析の専門家がともに取り組み、さらにこれからは健康分野の専門家も加わるという飯田氏の研究プロジェクトにはそのことが明確に表れており、「食」と「農」という対象が包括する分野の多彩さ、逆に見れば「食」と「農」というものを捉えるには多角的な視点が必要であるということがわかった。そして「食」と「農」は大変実践的であるトピックでもあり、そもそもがこれらにまつわる人間社会・地球環境を良くしていかなければならないという問題意識から始まっていることから、研究成果の実社会への適用も見据えなければならない。この社会還元の際には、調査対象である地元の人々との信頼性を踏まえた良好な関係性が必要である。このことは飯田氏の発表は勿論、被災地を対象とした望月氏の発表からも示された。

今回は「食」と「農」に関わる分野の異なる若手研究者、大学院生、実務者が一同に会し、互いの研究や仕事の情報交換が大変盛り上がった機会となった。ディスカッションにおいては大学院生、実務者から研究調査に関する沢山の素朴かつ重要な質問が出てきており、それに対し各話題提供者が自身の経験を踏まえて丁寧に回答をしていた。こうした研究室・職場以外での「先輩」から「後輩」への経験や知識の伝承は次世代の創造的かつ効率的な研究の素になることが示唆され、類似の機会を随時設けていくことで、未来の研究発展、および、研究成果還元によるよりよい社会の形成に資するのではないかと思われた。今回限りとせず、今後も引き続き参加者内外のネットワークで情報のアップデートを行っていき、有効な研究手法や結果の知見共有を行っ

て研究の発展に繋げていきたい。

謝辞

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の皆様，とりわけ事務局の小花様および助教の吉田様には資金の援助は勿論，事前の準備から当日の設営・進行まで多大なる協力を賜りました。また，参加者の方々には大変多忙なか参加いただけるよう調整いただき，貴重な話題や議論を沢山いただきました。ここに心よりの感謝を申し上げます。